

16. 超音波検査で診断された虚血性小腸炎の1例

土合克己, 松浦直孝, 広岡 昇
(都立大久保)

症例は60歳, 女性。突然の右下腹部痛と嘔吐にて入院。超音波検査で回腸終末部付近に壁第2層(低エコー層)の著明な限局性肥厚(粘膜下層の浮腫)が確認された。1カ月後狭窄増強にて手術となった。摘出標本で回腸に幅3.7cmの全周性U1-IVの潰瘍を認め, 組織学的に動脈内膜の肥厚, 静脈内フィブリン血栓, 繊維化とヘモジリン沈着を認める虚血性小腸炎と診断された。超音波診断上, 病変の限局性と週単位でかわる超音波像の把握が鑑別に有用と考える。

17. 当院における大腸ファイバー挿入の工夫

斉藤雅彦, 桜井 渉, 平野達也
三橋 修, 斉藤博文, 水本英明
山田 暁, 鈴木紀彰, 森 博通
福山悦男, 神田芳郎(君津中央)

当院では大腸ファイバー検査を無透視にて施行しているが, 最初は透視下において挿入パターンを研修するのが望ましい。

挿入に苦慮することの多いSD通過形の γ ループを3typeに分類し, その挿入手順をフローチャート化した。時にintentional α ループは必要操作と思われた。

hepatic flex, 通過に際して引き戻し操作, 吸引, アングル操作, 被検者の深吸気による協力, 体位変換の6つのポイントがあると考えられた。

挿入時の留意点として, 管腔の直視, 過剰なairの吸引, 引き戻し操作の重要性をあげた。

18. 千葉県富浦町における肝臓住民検診について

片平裕次, 梶川 工
(安房医師会病院)
原 久弥 (安房医師会)

千葉県富浦町において, HCV抗体陽性者のHCV-RNAを測定し, 肝機能の長期経過を追跡した。持続正常値を呈する例ではHCV-RNA陰性例が多く変動異常型, 持続異常型ではHCV-RNAが高値を呈する例が多く, HCV-RNA量が肝機能異常の出現頻度に深く関与していることが示唆されたが, またHCV-RNA陽性例において持続正常型の例も少なからず認め

られ, 他の因子も関与していると考えられた。

19. アンプリコア法によるHCV-RNA測定の臨床的検討

松本伸行, 広田勝太郎, 仁平 武
天野 晋 (水戸済生会総合)

アンプリコア法によりC型慢性肝炎患者の血中HCV-RNAを測定した。PCRの原理を応用したアンプリコア法は, 従来のPCR法に比べ安価で簡便な方法である。PCR法よりもやや感度が落ちる印象があるが, アプライ血清を100 μ lから300 μ lにすることで感度の上昇がみられた。

今後C型慢性肝炎のインターフェロン治療における治療経過のモニタリングとしての有用性が示唆された。

20. 当院におけるC型慢性肝炎に対するインターフェロン治療

清宮美香, 國行洋史, 北 和彦
五月女直樹, 三木 亮

(国立横浜東)

IFN治療を施行したC型慢性肝炎109例を集計し, 治療効果について検討した。著効率は36.1%であり, CAH2Bに比しCPHで, GPT高値例に比し正常値例で, また, IFN総投与量の多い例で著効例の多い傾向がみられた。終了後6カ月のRNA陰性化率は29.8%であり, 病理組織およびGPT値別では差を認めず, 総投与量の多い例では陰性化例が多い傾向がみられた。終了後6カ月のRNA陰性化例ではⅢ型とⅣ型が約60%を占めていた。

21. C型慢性肝炎のインターフェロン療法に伴う尿所見の変動

木下由彦, 佐藤慎一, 土田弘基
(国立佐倉)

IFNはC型慢性肝炎(CCH)治療に期待されているが, 副作用にも注意を要する。CCHにNSを呈した患者(MPGNとFGS)にIFN治療をし, 前者は軽快, 後者は悪化した。その作用機序解明の一つとして, 治療前に腎障害のないCCHに, IFN療法をして, 尿所見の変動から腎毒性を調べた。結果は, IFNは一部の患者に糸球体, 尿細管障害を惹起するが, 直接腎毒性の面では, 臨床上問題ない。但し, β は注意を要す。